MIRA TUKU

未来をつくる ソーシャルイノベーション 第2部

文・西村勇哉

暮らしの中から見つける変化の力

CASE: 59 夢―存在の不確かさと想像の力―

アポロンは、古代ギリシャにおいて夢の送り手として、神託を伝えていると考えられていた。デルフォイは神託所として古代ギリシャ最大の権威を持つ聖地とされている。
©Marie-Lan Nguyen／Wikimedia Commons

ドリームキャッチャーは、ネイティブアメリカンのオジブワ族に伝わる伝統的な装飾品。悪夢が網目に引っかかり、いい夢だけが網目を抜けて羽を伝って眠っている人の元に届く、と考えられた
©Jorge Barrios／Wikimedia Commons

POINT!

創造は常に想像の力によって生まれてきた。

京都の中心地から北西に10キロほど離れた山中に、『鳥獣人物戯画』の所蔵で有名な高山寺という真言宗系のお寺があります。下鴨神社や比叡山延暦寺などとともに1994年にユネスコの世界遺産に登録された寺院です。その高山寺を1206年に開山した明恵上人は、19歳の頃から58歳までの約40年の間に見た膨大な夢を記録し、世界最古の夢日記『夢記』を残しました。

また、今から約2200年前の前漢時代に書かれたとされる『周礼』には、夢占いを役割とする占夢の官の存在が記され、出版時期は不明ながら『周公解夢書』は夢の解釈の古書として日本や中国において重要な参考書とされてきました。また、古代北欧では夢解釈が広く扱われ、古代バビロニアでは夢解釈のテキストが作成されています。

夢の記述と解釈は、世界中の文化の中で時代を超えて重視されてきました。その一方で、夢の役割とメカニズムは現代の脳科学でもはっきりとしたことが分かっていません。

例えば、夢はレム睡眠時に見ると考えられてきた一方で、ノンレム睡眠時に見ると考える科学者も多くいるなど、夢についての理解はまだ仮の域に留まっています。

スタンレー医学研究所の研究副部長を務める、E・フラー・トリーは、著書『神は、脳がつくった』（ダイヤモンド社、2018）において、脳科学と考古学の見地から、約4万年前にホモ・サピエンスに起こった夢の存在による人類の変遷について言及しています。その中でトリーは、人は、夢の世界での既に亡くなった人との出会いで、現実世界とは異なる祖先の世界の存在を信じるに至り、祖先への願い事（狩りがうまくいくように、健康でいられるように、など）と、その結果（叶った or 叶わなかった）によって、願いの対象としての祖先を生み出し、やがて願う対象としての祖先の統廃合を通じて、神の概念の誕生へとつながっていったという見解を述べています。

願う行為は祈りへとつながり、ギョベクリ・テペの遺跡に見られるように祈りの場が集住を生み出し、やがて集住が農耕を、農耕が都市を、都市が文化を生み出してきました。

夢は、それ自体はまだ詳しくは分かっていない不確かな存在です。そして、存在の不確かさとは異なる、人々の想像力が文化を生み出してきました。創造は常に、着想によって始まります。

にしむら・ゆうや●NPO法人ミラツク代表理事。大阪大学大学院にて人間科学の修士を取得。人材育成企業、財団法人日本生産性本部を経て、2008年より開始したダイアログBARの活動を前身に2011年にNPO法人ミラツクを設立。Emerging Future, we already have（すでに在る未来の可能性を実現する）をテーマに、全国横断型のセクターを超えたソーシャルイノベーションプラットフォームの構築と未来潮流に基づいた新規事業創出のためのプロジェクト運営に取り組む。
http://emerging-future.org

sk2003_P107ミラツク.indd 123 2020/02/19 11:42